

大名が一番大事にした文書

―盛岡南部家宛徳川將軍家領知宛行状考―（下）

千葉 一大

二 発給手続き ―天保度の朱印改を例に―

領知宛行状類は、將軍代替わりの際、継目安堵という形で発給が行われるが、その際各大名家が以前將軍家から発給された領知宛行状類などを幕府側の役人に差し出して検閲をうける手続きが行われた。これが朱印改である。さらに、発給に際しては江戸城中において儀式が執り行われた。この具体的手続きを分析することから、宛行状そのものもつ意味、さらに手続きの推移を追うことで宛行行為のもつ意味を明らかにすることが可能になる。

全国の大名に一齐に領知宛行状が発給され、大名の領知などがほぼ固まり、幕藩体制確立を画す重要な意義を有するとされる寛文印知時の手続きについては、別稿^⑥に具体例という形で記したので、ひとまずそれに譲る。本稿では、南部家の天保次の領知宛行状受領に関する一件記録「天保八丁酉年十二月分同九年・同十年八月迄御様子書下留」により、「寛文印知」以降の発給手続きについて検討する。その手順は、以下の七段階、すなわち、

- ① 幕府側「御用懸」役人の任命と朱印改実施の伝達
 - ② 国許からの宛行状類持参
 - ③ 朱印改の準備と提出物作成
 - ④ 朱印改
 - ⑤ 村寄目録の提出
 - ⑥ 宛行状と目録の発給
 - ⑦ 後処理と宛行状類の国許への送付
- に分けられる。この順序に従い、発給に至る経過を述べる。

① 幕府側「御用懸」役人の任命と朱印改実施の伝達

藩側の記録が起筆される以前の段階で、幕府側の「御朱印・御判物御用懸」（盛岡藩の史料による）として、担当の老中、朱印改奉行、儒者（林家）、右筆組頭、右筆が取り扱い役人として指名されている。発給実務の責任者である朱印改奉行には、貞享度以降、寺社奉行（奏者番兼任）と奏者番（専任）から一人ずつ命じられている。任命された「御用懸」役人は朱印改終了時まで異動がないというわけではなく、御用中に死去

したり、他の重要な役職に転じたりして交代することもある。⁽⁶²⁾ この天保の朱印改でも、朱印改奉行をつとめていた奏者番兼寺社奉行井上河内守正春（上野館林藩主）が大坂城代に転出したため、後任に奏者番兼寺社奉行の牧野備前守忠雅（越後長岡藩主）が命じられたことが、天保九年四月二十二日に大目付から南部家に伝達されている。

注目すべきは、既発表の拙稿でも言及したように、朱印改へ林家をはじめとする儒者が関与していたことである。⁽⁶³⁾ 林家の職掌について荻生茂博氏は、近世日本の国家権力を占有した徳川將軍家の「中心」性を示し政権の永続を左右する儀礼的秩序の全般に渉り、儀礼ないし位階的秩序の制定執行を担ったとする。⁽⁶⁴⁾ その意味から、將軍と大名間の主従関係の根幹を規定する領知宛行へ林家の関与が求められたのは当然だった。⁽⁶⁵⁾ 朱印改における林家の具体的役割は、貞享朱印改において「（林）春常・（人見）友元等遂校合、写留置之」と史料にあるように、宛行状類の校合、文字の詮議などに参画することであった。

大名家側では朱印改における林家の具体的役割をよく認識していた。例えば、鹿児島藩主島津家では、寛文印知の際、領知目録に領内の郡名が誤記されたとして、貞享の朱印改の際に古来通りの文字に戻すことを林春斎（信篤）に依頼、その取り持ちによって依頼通りの結果を得たため、謝礼として信篤に「琉布二反」を贈っている。⁽⁶⁷⁾ 朱印改において、領内の地名などの異同が正されることは、幕府の全国支配にとっても、大名家側の領国支配にとっても基本をなす事項の決定であり、朱印改の実質的意義の一端を示している。

天保八年（一八三七）十月二十七日に「御判物等御用司御老中」であ

る脇坂安董からの呼び出しを受け、出頭した盛岡藩留守居役加役吉田一学に、脇坂家の公用人田付録右衛門から、大名家側に対する朱印改について、左記の書付が手交された。

覚

- 一、万石以上之面々領知之御判物・御朱印被下付而、本多下総守・井上河内守、可被相改旨被仰付候事、
- 一、御代々之御判物・御朱印所持之面々^者、御判物・御朱印二、写を添出之、右兩人御本書拜見之上、写を可留置候、勿論国郡鄉村高辻注帳面可被差出之、御朱印無之面々^者、領知之高・国郡鄉村委細書注、兩人^江可被渡之事、
- 一、御加増・拝領、或所替之面々、或御判物・御朱印高之内領知分候面々、其旨趣具書注、兩人迄可被達候事、
- 右之外可被相伺儀^者、兩人^江可被承合候、以上、

酉

十月

この達の書付は、御用懸の奏者番・寺社奉行の名、提出書類とその仕様について伝達する内容となっており、朱印改御用懸の老中が留守居役を呼び出し、手交することで大名家側へ伝えられている。この達は、寛文次のものと内容的にもほぼ同一である。朱印改奉行として名前が挙げられているのは、奏者番の本多下総守康禎（近江膳所藩主）と奏者番兼寺社奉行井上河内守正春である。この達の書付は吉田一学が屋敷に持ち帰り、江戸詰家老毛馬内典膳に提出している。

これとは別に、御用懸からは、提出書類の作成や朱印改当日のことに

ついて、提出書類の書式を含めた細部にわたる指示が行われる。

十一月二十七日、再び脇坂から盛岡藩の留守居役に呼び出しがあり、留守居役戸来弓人が出頭したところ、脇坂家の用人加集卯右衛門から、寺社領に対する朱印改に関する書付が手交された。こちらは、従前幕府から領知朱印状を得ていた寺社に対して、所領の多寡に関わらず朱印状を発給するので、既発給の朱印状原本に写本を添えて、来年四月から六月までの間に江戸に持参し、朱印改奉行に提出するよう命じたものである。盛岡領内には朱印地を有する寺社は皆無のため、十二月に入って藩主南部利済名で朱印改奉行に対し、その旨を届け出ている。

② 国許からの宛行状類持参

盛岡南部家では領知判物・領知目録を国許盛岡城内の御宝蔵に保管していた。国許で保管されていた領知判物・領知目録は、朱印改の際には江戸に運ばれ、朱印改奉行の検分をうけることになっていた。この場合儀式などを伴う手続きがとられる。

天保八年十月二十三日に、盛岡において、目付の高野織江、高野の指し添えとして使番浅石治左衛門、さらに道中の宰領として徒の者五名、下宰領として同心（足軽）七名、判物を入れた長持の昇役として長柄の者八名が、判物に付き添い江戸に登るよう命じられた。さらに十二月十六日、高野らは同月二十四日に盛岡を出立するよう達せられた。

領知判物については、前回発給された判物だけではなく、既発給の判物すべてが江戸に送られる。領知目録、郡毎に領内の村名・石高が記載され朱印改の際に提出される郷村高辻帳の控や、前回朱印改の様子書留

といった関係する書類とともに、それらは盛岡城淡路丸の宝蔵において常時保管されている。宝蔵から取り出すにあたり、まず担当役人が保管状況を確認し、その後蔵からすべての判物・領知目録が運び出された。⁶⁸⁾

天保八年十二月二十三日、九つ時（正午）過ぎから盛岡城中丸（二の丸）御殿の菊之間において荷造りの作業が行われた。この作業には五人の家老をはじめ、近習頭、用人、小納戸役人が出座し、または判物に付き添って江戸に登る高野・浅石も出席した。そして既発給の領知判物八通、領知目録七通⁶⁹⁾、郷村高辻帳六冊の見分を行った後、小納戸役がそれらを箱に詰めた。箱の数は五箱で、家老の八戸中務による印封がされた。さらに箱を防水のため油紙に包んで長持に入れ、錠を下ろした上で、八戸中務が長持を印封し、その上から雨雪除けの雨皮を掛け、運搬のための輪工（杵）をかけた。そして、高野には箱の鍵、箱の内容を記した目録「入目録」が渡された。長持はそのまま菊之間の床の間に置かれ、徒の者二名が明朝まで不寝番を命じられた。

天保八年十二月二十四日、朝五つ時（午前八時）過ぎ、中丸御殿の表玄関から判物が江戸に向けて出立した。出立の際には、玄関に家老・近習頭・用人・月番寺社町奉行・当番目付が並び、徒目付二名が玄関外の「御白洲」に控えた。また中丸御殿内の広間には中丸番頭と番士が詰めていた。これらは藩主の参勤出立時と同様の礼式で、また城内の通行も藩主の通行に準じた礼式がとられ、さらに領境までは先払いがつけられた。領知宛行状という文書の通行は、その適用範囲である盛岡領内では、藩主の行列並みの扱いで遇されたのである。

なお、天保八年の際には当時の藩主南部利済は江戸参勤中であつたが、

嘉永七年（安政元年、一八五四）の際には、藩主南部利剛が国許におり、閏七月十八日に行われた荷造りの際には、宝蔵から取り出された領知判物と領知目録が盛岡城の本丸玄関から本丸御殿に入り、藩主が通常着座する御座之間の次の間に置かれ、利剛は肩衣を着けて御座之間へ出座し、自ら判物を改めている。^{⑦⑩}

このように煩雑な儀礼と、丁重な取り扱いをもって領知宛行状類が江戸に送られた。山本博文氏が指摘するように、^⑪將軍が発給した領知宛行状そのものに將軍の発給する文書、大名の地位を決定する文書としての權威が備わっていたのもさることながら、拝領する大名家にとっても、領内を通行して江戸に赴く藩主の地位の源泉、象徴である領知宛行状を物々しい儀礼と道中行列で送り出すことで、当該文書を拝領し、受け継いできた大名の地位、さらにはその背後にある將軍の「御威光」を領民に強く印象付け、江戸時代の支配原理、幕藩制国家におけるヒエラルキーを再確認させる目的があったのではないか。

③ 朱印改の準備と提出物作成

盛岡から判物が江戸外桜田の盛岡藩上屋敷に到着したのは、年が明けて天保九年（一八三八）正月八日のことである。家老・用人・江戸留守居役など諸役人が式台に居並ぶ中、表玄関から判物が入った長持が搬入され、藩主居間の書院床前に据え置かれ、手目録と照合して長持の本身が確認されたのち、家老毛馬内典膳によって長持に封印がなされ、不寝番が建てられた。そして到着から、朱印改への準備が開始される。

正月二十三日から、朱印改に提出する判物・目録の写と、郷村高辻帳

の正本・控の作成が開始された。判物・目録の写は原本と寸分違わぬ精密な写の作成が要求されており、料紙は判物写が上引合紙、目録写は五分奉書紙、郷村高辻帳は上程村水打紙、その控は上美濃水打紙が用いられた。判物・目録の写の作成は南部家上屋敷の居間書院御次之間で行われ、目付・使番・小納戸役人が常時部屋に詰め、江戸詰の家老・用人が時々見回るなかで行われた。一方郷村高辻帳は右筆役所で作成が行われた。作成の際使用される判物・目録の原本と郷村高辻帳は、日々受け渡しと返却が行われ、家老によって毎日封印されていた。一方、朱印改懸の幕府役人に対して内見させるための書類も同時に作成された。

三月二日に南部家の留守居役川嶋栄太郎に朱印改奉行の本多康禎家臣から提出書類作成に間違いのないよう、作成要領と書式をまとめた「口達之趣覚書」が手渡された。それらの内容の概略を、作成書類別にまとめておく。

(a) 領知宛行状……所持する領知朱印状・判物はすべて写しを作成。写は原本の通り書き記し、判物であれば將軍の花押の位置に「御判」、朱印状ならば朱印の位置に「御朱印」と認め、写には端裏に発給者を明記した小さな貼札を貼り、下の方に当主の名を記して提出。

(b) 郷村高辻帳……貸与される案文をもとに作成。以前提出したものと相違があった場合、その箇所を訂正事項を記した貼札を付し提出、また本書同様に作成した控を二部提出。朱印改に作成が間に合わなければ、追って提出。

(c) 領知目録……最も近い時期に発給されたものの厳密な写を作成し提出。

(d) 差出目録……前回の領知判物・朱印状発給後、所替、村替、分知配分で領知の村数が減少、国郡村名違・変更が生じた場合、所持する鄉村高辻帳、領知目録と違いがあれば提出。

さらに覚書では、改の前日には通知するので、当日領知判物・朱印状の原本と写を持参すること、その際持参した領知朱印状・判物の目録である手目録を提出すること、なお、目録の末尾に当日の領知目録・鄉村高辻帳提出の有無を記すこと、また、朱印改に提出書類を持参する使者の身分は家老・用人が務め、その衣服も熨斗目・麻上下、使者に同道する者は服紗小袖・麻上下の着用がそれぞれ想定されていること、当日はまず役人に面会のうえ改の手順を聞き合わせることに、そして、改の案内をする都合上、提出書類が出揃えば奉行に対し通知をすることなど、提出書類の書式細部や朱印改当日の服装にわたる詳細な指示がされている。

三月十七日、朱印改奉行の本多康禎が、作成の終わった南部家の判物・目録の写と鄉村高辻帳の草稿を内覧した。本多は、判物はこの通りで良く、領知目録の末尾、朱印改奉行の連署記載を「在判」とあるものを「判」とのみ記し、また紙継ぎ目の裏印が捺してある位置に「印」と記すことを指図した。この指示は本多家用人を通じて南部家の留守居役戸来弓人に伝えられている。三月十九日、南部家では朱印改奉行に対し、写が完成したとの届書を提出した。

④ 朱印改

天保九年閏四月二十四日、朱印改奉行から南部家に対して留守居役を明日出頭させるよう通知があり、翌二十五日に留守居役戸来弓人が出頭

したところ、明日判物ならびに写を持参すること、その際には領知目録とその写、さらに作成が済み持参可能であれば領知目録の写・鄉村高辻帳を持参するようにと達せられた。領知目録の写本や鄉村高辻帳は、未完成であれば、後日の持参でも差し支えなかったようである。達を受けて南部家では持参する領知宛行状類の確認作業が行われ、朱印箱に改めて家老が封印し、不寝番を立てて翌日に備えた。

二十六日、使者である南部家用人白石判左衛門、使者の付き添いとして留守居役戸来弓人が、判物を入れた長持を中心に行列を仕立てて、外桜田の南部家上屋敷を出発した。この日の改に南部家が準備し、持参した書類は以下の通りである。

(a) 領知判物

ここまで南部家が発給を受けたすべての領知判物を包紙・本紙ともに提出。本紙は折懸の上包(包紙)に包んで重ね、全体を五分広奉書に包んだうえで、中ほどを結び、それを浅黄羽二重袷襦袢に包んで白木の内箱に入れ、その上をさらに浅黄羽二重袷襦袢に包み、柾目の通った上質の桐(縞桐)製で錠前をつけた外箱に入れる。

(b) 領知判物の写本

領知判物を原本同様にそのまま書き写すが、將軍の花押の箇所には「御判」と記す。料紙は本紙・包紙すべて上り引合紙を用いる。八通それぞれ別の写しを作成し、一括して提出。本紙には一通ずつ端裏に美濃紙で貼札(小札)を付す。一つの貼札には「(將軍の院号) 御判物写」(例えば「大猷院様 御判物写」と書き、上部に貼る。もう一つの小札には「当主南部信濃守」と書き左下部に貼る。包紙も原本同様に作成する

が、八通を一括して一緒に包み、その上書きに「御判物写八通 当主南部信濃守」と記し、茶色の袱紗に包んで、それを「御判物写 当主南部信濃守」と上蓋に記した白木の箱（内箱）に収める。

(c) 領知目録

持参した直近発給の目録一通を本紙と包紙共に提出。領知目録も領知判物と同様の状態で外箱に入れる。

(d) 領知目録の写本

通常料紙については引合紙・檀紙を用いるとされるが、南部家では、先例もあり、三月五日に外広奉書（幅広奉書のことか）という紙を用いる旨、幕府に届書を出し、十七日に付札によって前例に則って作成するよう指図を受けている（「判物認方留書」）。実際には五分広奉書を料紙に用い、文字は「文字置所迄少も不違様」原本のとおりに記す。端裏には「当主南部信濃守」と記した美濃紙の小札を左下端に貼付する。折懸の包紙は本紙と共紙で、上書きに「領知目録写 当主南部信濃守」と記す。茶の袱紗に包んで、領知判物写の内箱の上に置き、あわせて「御判物并領知目録写 当主南部信濃守」と上蓋に記した外箱に収める。

(e) 郷村高辻帳・控

領内の国郡と村毎に村名と村高を記した帳面。料紙は水打程村紙を用い、正本と奉行が用いる控の二冊を作成。表紙には「陸奥国盛岡領郷村高辻帳」と記し、左下に藩主名を記す。作成は清書が終わったのちに表具師を呼び仮綴じを行い、そのあと冊子の背の部分に紙を貼って綴じ目を包み、背を包んだ紙と表紙・裏表紙との継ぎ目に表に藩主の印を上下に二つ、裏に一つ捺す。また各見開きの真ん中に捺印する。正本はマチ

のついた箱袋、奉行用控はマチのない普通の紙袋である平袋に入れる。末尾の差出の部分の記載は、年月日下に正本には藩主名の下に印判を押し、花押を据える。控には藩主名の下に捺印せず、花押も記さない。完成した郷村高辻帳は正本・控を共に内箱へ収め、それを茶色の袱紗に包み、「郷村帳 当主南部信濃守」と上蓋に記した白木の外箱に収める。

(f) 手目録

判物改のために提出する領知判物とその受領者名、発給年月日を簡条書きで列記し、同時に領知目録・郷村高辻帳について提出の有無を記したものである。差出は朱印改の使者をつとめる家臣と手引きをする留守居役名である。料紙は大奉書の半切で、上包は上美濃紙で包紙には「手目録」と書き、その下部に「使者」である家臣（この場合は用人白石半左衛門）名、その左に手引き役、「案内」として、改に使者とともに改に出座する留守居役（この場合は戸来久人）の名前を記す。

(a)～(e)の入った箱はあわせて「惣箱」に収め、長持に入れられた。(f)は使者が持参した。

行列は朱印改奉行である牧野忠雅の屋敷に到着した。白石・戸来は、応対した牧野家の用人に対し、判物を持参した旨の口上を述べ、(a)～(e)は「惣箱」ごと引き渡し、(f)も使者から用人に渡された。牧野家側で判物などが箱から取り出され、箱の蓋に載せられて朱印改の席に運ばれた。使者が懸り役人に拝礼した後、朱印改が始められた。

提出を終えた使者は朱印改が済むまで控えていたが、牧野家の用人が現れ、先判である家斉の判物写を原本と照合したところ、直近の先判である徳川家斉発給の判物と写について、写の「月日御判」の記載が原本

に比較して右に寄っていて原本と異なるため、本日の所は一旦すべて差し戻すと告げられ、提出書類一式をすべて差し戻された。朱印改は、提出書類の記載や原本照合が不十分であったことが確認された場合、その日のうちに実施されず、不備があるとされた書類はすべて返却されるという厳しいものだった。

提出書類が受理されなかったことを受けて、盛岡南部家では右筆に対して判物写を再度残らず調製し直すよう命じた。実際に改めて確認すると、指摘された通り原本と相違する部分も見受けられた。提出書類に不備が生じた原因は、判物写の作成に当たって、原本ではなく以前作成された写を用いて調製されたためだったという。このため、今回は、役人を立ち会わせ、原本を手本に寸分違いのないように判物写が作成された。

南部家同様、書類の不備を指摘されて差し戻された大名はほかにもあり、南部家がそれらの大名に問い合わせたところ、立ち会っている幕府の右筆組頭森伝右衛門が書類の不備を指摘していたとのこと、この人物を事前に「御頼」として依頼し、提出物の内見をさせると良いということが明らかになった。南部家ではさっそく森のもとに、留守居役の戸来が判物の写を持参して赴き、「御頼」を依頼し、内覧を要請した。森は確認を終えると、実際に写の問題点を具体的に指摘し、その指摘を受けて吟味をしたところ、指摘通りに原本との相違が生じている部分もあったのである。指図通りに改めてその日のうちに作成を終え、夕刻に朱印改奉行の本多康禎に戸来が判物写を持参して内覧を要請し、翌日改めて戸来が参上したところ、本多家の用人からこの通りでよいと伝えられた。

五月二十二日、朱印改奉行より翌日に再び判物改を行うので出頭する

よう命じられた。これをうけ南部家では、役人立ち会いの下、提出物の最終確認を行ったが、再び判物原本と写が異なる点が確認され、二通を再度作り直した。

五月二十三日、朱印改奉行の本多の屋敷で再度朱印改が行われた。出頭した使者と留守居役は牧野家の用人に判物箱を引き渡したのち、彼の手引きで「習礼」を行った。「習礼」とは朱印改の予行練習のことであり、朱印改は確認作業であると同時に、大名の権威の根源である領知行状類を再度將軍から発給してもらうことに対する儀礼的な要素を伴うものだったことがわかる。発給される判物が將軍の権威を帯びたものであることの現れが、儀式張った朱印改の所作にも見られる。

朱印改は閏四月二十六日と同様の手順で行われた。その場に列席したのは、朱印改奉行の本多と（牧野は所用のため欠席）、幕府の儒者である林大学頭・林左近将監、表右筆組頭森伝右衛門、表右筆の人見弥右衛門・新家栄之助・小角十郎兵衛である。控えの座にあった使者と付き添いの留守居役は、改の場に再び呼び出され、本多から改めが済んだので判物を返却すると伝えられ、使者らは判物を受け取りその場を退出した。領知目録は後日返却することが本多家の用人より伝えられた後、判物は本多家の屋敷の正門から、使者は屋敷の潜り戸から退出している。判物はあくまで將軍の権威を帯びたものとして、表門から出入りがなされる一方、大名の代理ではあっても使者は又者としての扱いを受け、通用口からの出入りとなったのである。朱印改完了をうけて、南部家では使者を朱印改の担当老中脇坂安董と本多・牧野の両朱印改奉行のもとに送り、南部家の朱印改が終わったことを報告し、対応を謝した。

なお、留め置かれた領知目録は五月二十七日に本多から出頭した戸来に返却されている。

朱印改の用が済んだ判物類は、八月二十五日に江戸から移送したときと同様の運搬方法で再び国許へと戻された。道中にある中田関所（栗橋関所）を通過する際には、判物長持を番所前に差し掛け、関所役人に対して「南部信濃守御判物返二而御座候、国許^江差下候」と言上する。関所役人が内容の特段改めずに通過させていることから、將軍の權威を帯びた文書である領知宛行状類の特殊性が見て取れる。

⑤ 村寄目録の作成、提出

南部家では天明八年（一七八八）の領知宛行状発給後郡名や村名を変更したとして、朱印改を経て発給される領知宛行状類においてそれらが表3のように訂正されるよう求めた「御領知目録文字替願書」を三月二十八日に朱印改奉行に対して提出した。

このうち、紫波郡については、表1・表2において示したように、宝永度の領知宛行状類までは「志和郡」と記されていたものが、享保二年（二七一七）発給の領知宛行状類から「紫波郡」という記載に変わったもので、天保八年九月十五日以降、この表記をめぐって勘定奉行明樂飛驒守茂村とたびたび書面のやりとりを経て、議論を重ねてきたものであった。⁽⁷³⁾

ところが、十一月十三日に呼び出された留守居役川嶋栄太郎に対して、紫波郡と稗貫郡金谷村については変更を認めず、そのほかは南部家の申し立てどおり書き改めるという回答があった。この指示によって、紫波

郡を含む地名表記が「以来右二居直候事」ということになった。⁽⁷⁴⁾寛文印知の事例でも言及されているが、朱印改・領知宛行状類の発給における調整作業が、その後の地域の枠組みを定め、現代まで地名表記にも影響を与えていることは、領知宛行状類の発給・朱印改のもつ意義の一つではないか。

石井良助氏は村寄目録について、「朱印改の当時当該大名が領知している目録」で、村の収公に伴い代地の村が宛がわれるのと共に新しい領知目録が与えられればそれが使えるが、それがない場合には国郡別の村寄目録を作成・提出するものとしている。⁽⁷⁵⁾南部家では一〇万石高直し後最初に行われた貞享元年の朱印改時に「国郡鄉村寄」と題して、改の時点における領内の郡名・村名と郡毎の高について記載した目録を提出している。また、もりおか歴史文化館に所蔵される天保度に提出された村寄目録の控をみても同様である。この二つの目録は、南部家に二度あった高直しの後最初の朱印改の際に提出されたものの控であり、この南部家の事例を踏まえて考えると、領内の村の収公のみならず、前回の領知宛行状の発給以降に領知の異同が発生した場合、朱印改において目録作成のため、朱印改奉行の要請に基づいて、領知高・村々を明記して目録を作成し提出したものとみた方がより適切であろう。

村寄目録の作成に当たっては、その書式の雛形などが朱印改奉行のものから南部家に貸し出されており、その書式に基づいて目録が作成されることになった。⁽⁷⁷⁾料紙は五分広奉書で堅紙、紙を継いだ継紙である。残された村寄目録の控を確認すると、末書には文化五年の領知高を二〇万石に高直しをうけた際、新田高のうちから一〇万石を移し加えたこと、

高直し以後領知判物・領知目録を受領していないと記され、差出として、今回改めをうける大名の名（この場合、藩主南部利済の名乗りである「南部信濃守」）が記され、名前の下に印を捺し、花押を据える。宛名は朱印改奉行両名で、紙の継ぎ目には藩主の印が真中に一つ捺印されていた。

南部家では村寄目録の調製を十二月十九日に終え、郷村高辻帳とともに留守居役の吉田一学が本多康禎の屋敷に持参、提出された。

⑥ 宛行状と目録の発給

朱印改が終わると、大名に与えられる領知判物・領知朱印状および領知目録が、表右筆の手によって作成される。

領知宛行状の発給は、寛文印知では五月雨式発給であったが、貞享次以降に採られたのは、江戸城において、一定の日を定め、將軍の出座のもと、発給の儀式を執り行うもので、発給者たる將軍の威光を列席の大名に見せつけるという性格のものであった。

天保十年（一八三九）二月二十二日、幕府の大目付初鹿野河内守信政・目付池田修理の連名の廻状が南部家に届けられた。その中で初鹿野らは、近々領知判物の発給があることを告げ、帰国中・病氣・幼少など受領に故障のある場合は事前に通告し、差し出す名代について姓名を二十六日までに朱印改の担当老中脇坂安重まで届け出ること、また初鹿野と池田にも二十七日までに書付を提出するように通達した。

当時、盛岡藩主南部利済は、病氣療養のため江戸に留まっていた。南部家は蝦夷地警備を担う家として、利済の願い出により、嫡子の南部信

侯（のちの利義）が父の名代として盛岡に下向、滞在していた。嫡子在国中の南部家では利済の名代として分家にあたる八戸藩主南部信真、彼に差し障りが生じた場合の代わりとして三河拳母藩主内藤政優⁽²⁸⁾を挙げた名代書付を十一月二十五日付で脇坂と初鹿野・池田に提出した。

三月二日には初鹿野から大目付廻状によって、判物拝領儀式の通知があった。その内容は、同月五日・六日の両日に判物を下付すること、二日目に在国中・名代の面々に下付すること（すなわち、初日は在江戸の大名に対して下付することになる）、受領する大名・名代は二日間のいづれも五つ半時に集合のこと、熨斗目・半袴着用のこと、受領後、御礼として大老・老中・若年寄に対する廻勤を行うこと、なお、二日目拝領の面々は御礼として使者をもって書状を呈することというもので、儀式の日取り、集合時間、着用する服装、受領後の御礼廻りなどについて対象者に通達するものだった。この達しによれば、名代を立てる南部家は二日目に判物を受領することになる。

受領前日の三月五日に、翌日五つ半時（午前九時頃）に名代を登城させるように命があり、翌六日五つ時（午前八時頃）に、名代の南部信真が定められた熨斗目・半袴を着用して麻布市兵衛町の屋敷から登城した。

一方、盛岡南部家の留守居役川嶋栄太郎と目付高野織江らは、判物を収める白木の箱と長持を準備し、信真より先に江戸城に向かった。川嶋と高野は本丸御殿の玄関から箱を持参して蘇鉄之間に入り、待機する。判物を収める長持は、白木で作られ、その上に南部家の定紋が付いた油革をかけたもので、まず本丸の南の入り口に当たる桔梗門の外に待機し、老中の登城が済むのを待ってこの日受領する他家の長持とともに奥

の中之御門外まで入り、そこに留まる。

信真は登城後に儀式の予行練習である習札に参加した。その後黒書院に將軍徳川家慶が出御し、判物を受領する順に一人ずつ出座し、奏者番より名が披露され、家慶から領知判物を下さす旨の「御錠」があり、將軍への謝意については老中から返答がなされた。

信真も懸老中の脇坂安董から利濟宛の判物を受領した。受領後、信真は、判物を大広間前御廊下まで持参した。そこに控えていた川嶋は屋敷から持参した箱を開け、中に入っていた浅黄色の帛に信真自らが判物を包み、箱に収めて直封し川嶋に渡した。箱はさらに帛で包まれ、御殿の玄關御廊下まで持ち出された。信真を初め大名たちが退出した後、受領した各大名家は玄關前に判物を収める長持を順に呼び入れる。川嶋と高野は判物を玄關薄縁まで持ち出し、長持に収め、行列を立てて帰途にいった。

下城した信真は、外桜田の南部家上屋敷に立ち寄り、その後利濟の名代として大老・老中・若年寄の屋敷を判物発給の御札として廻勤する。一方、判物の行列は上屋敷の表門から入り、玄關で御徒が長持を受け取り、そのまま御小書院に運ばれて安置された。

領知宛行状の発給後、朱印改奉行から領知目録が発給される。天保十年三月八日に、朱印改奉行の用人から留守居役に書翰が到来し、領知目録を渡すので、明朝九つ時、奉行の本多康禎の屋敷まで留守居役一人を出頭させるよう伝えられた。これに対し南部家からは留守居役が請書を提出している。

翌日、川嶋が熨斗目上下を着用し、挿箱に目録を納める白木の箱を茶

の帛に包んで入れ、本多邸に出頭した。他家の留守居役も出頭していて、川嶋は彼らと共に順に罷り出て、本多から直々に目録を受け取った。受領後、目録は持参した箱に入れられ、川嶋が封印し、外桜田の上屋敷に持ち帰った。屋敷に着くと、内玄關から入り、御居間書院に運び入れると、まず藩主利濟が目録を披見した後、再び箱に収められ、家老の毛馬内典膳が封印した。南部家からは懸老中の脇坂と朱印改奉行兩人に対して使者を送り、目録受領の旨を届け出た。

⑦ 後処理と宛行状類の国許への送付

領知宛行状類の受領後、南部家では懸老中、朱印改奉行（朱印改奉行担当中、奏者番から大坂城代に転任した井上正春にも贈進）、朱印改に立ち会った儒者や表右筆などに対し「御祝儀」を贈り、謝意を表している。

一方、幕府勘定奉行から三月二十五日に呼び出しがあり、朱印改が済んだことを受け、大名家に対し、郷村帳（郷村高辻帳の写本）・御添目録写（領知目録の写。領知宛行状に添えられて発給されることからこう呼ばれたものか）の勘定所への提出が命じられた。これを受けて南部家では四月二日から作成をはじめ、七日までに作成を終えている。

勘定所に提出される郷村帳は、南部家が朱印改奉行に提出したものと同内容で作成されるが、末尾にある藩主の印判・花押は省略され、その位置には「印判」「据判」と記される。そして、差出として用人兼留守居役の枋内瀬蔵の名が記され（「南部信濃守内 枋内瀬蔵」、宛所を「御勘定所」とする奥書が加えられる。また、御添目録は領知目録をそのまま書き写すが、末尾にある朱印改奉行の花押は省略され、その位置に

「在判」と記す。こちらも差出は栃内瀬蔵で、郷村帳同様の記載形式で名が記され、宛所も同様である。なお、これらの提出書類の料紙はいずれも高級紙の程村紙で、帳面に仕立てられ、栃内の印を表表紙には上下二箇所、裏表紙には中程に一つ契印として捺し、それぞれを箱袋仕立ての上袋に入れ、表題を帳面の通りに記し、左下隅に「南部信濃守内 栃内瀬蔵」と記す。

これら郷村帳・御添目録写は、四月二十七日、留守居下役駒嶺勇治が勘定所に提出され、受理された。

一方、発給された領知判物と領知目録は保管のため国許に送られる。天保十年八月十六日にその荷造りが行われ、藩主利済が立ち会い、まず江戸詰の家老・用人らが判物・目録を拝見の後、小納戸役人に判物・目録の収納を命じられ、家老毛馬内典膳・用人が立ち会いのもと、利済が箱を閉じて自ら封印し、判物に随行して国許に下る用人長谷川源内・納戸役の本堂左右に手渡した。この箱はさらに二重箱の中に入れ、綿を詰めて長持に入れ、長持の中にも綿を詰めて蓋を閉じ、錠前を下ろして毛馬内典膳が封印した。そして収納内容を記載した手目録と錠は源内に渡された。翌八月十七日、寅刻に判物は行列を立てて、上下を着用した役人たちが見送る中、国許へと出立した。

国許に到着した領知宛行状類は、盛岡城中丸御殿の玄関前「敷出」^{あげまき}まで出迎えるなか、玄関から入り、廊下橋で結ばれている本丸御殿の総角^{のま}之間に至った。総角之間では在国中だった藩主嗣子の南部信侯に迎えられた。信侯は利済が付した直封を披き、判物・目録の在国の重臣たちに拝見を許した。それが終わると、それらは再び箱に収められ、信侯の印

を捺した「印紙」で直封がなされ、信侯から家老に箱ごと渡された。その後関係役人の立ち会いのもと、盛岡城淡路丸の宝蔵に納められた。

国許出立の際にも述べたが、領知宛行状類の江戸・盛岡間の移動に際しても、大変厳重な取り扱いのもと、文書であるにもかかわらず、藩の役人たちが見送り、出迎えをうけるなど、最高級の扱いをうけている点に注目しておきたい。これは文書そのものに権威と格式が存在することを示すものである。文書についているのは將軍の「御威光」であり、その七光りで領地支配を行う大名自身の権威にもつながる。大名の立場、そしてその領地支配は、過去の経緯はともかくとして、宛行権者たる徳川將軍の承認により、権威に依存する形で成りたっていたものであつて、それゆえに、領知宛行状類の扱いは、將軍の威光を示し、さらには大名による領地支配の根源として、それ自体に権威を帯びるものとして扱われ、象徴的に奉られたのではないか。

三 領知宛行状類の保管と管理

幕府から大名家に与えられた領知宛行状類が、朱印改時以外、普段においてはどのように管理され、扱われていたのかという点については、知るところが少ない。自家の正当な支配を保証する最重要文書であるだけに、領知宛行状類は子孫に確実に受け継がれるものでなければならなかったはずである。

盛岡藩の藩政史料の中には、文化三年（一八〇六）二月に作成された重要文書の台帳で、文書末尾に御小納戸役人の連署・押印がある「淡路^⑨

丸御判物并御内書・御官位帳」(以下「判物・御内書・官位帳」と略記) および嘉永七年(安政元年、一八五四)七月に作成された判物改時の手続きを記す「御判物為御登被成候付御手続并諸書付」の記述に、盛岡藩が普段どのように領知宛行状を保管していたかをうかがわせる手がある。それによると、南部家では領知判物・領知目録を含む重要文書・器物を国許の盛岡城内淡路丸にある御宝蔵に保管していた。淡路丸とは、盛岡城本丸の東・南・西をめぐる腰曲輪のうち東側に位置する部分を指してこう呼ぶ。⁽⁸⁰⁾

「判物・御内書・官位帳」では、記載内容や貼付されている見出しから、淡路丸御宝蔵の収蔵文書・器物が、①領知判物である「御判物」、②「御領知目録」、③領知判物・領知目録の写や、朱印改に関わる郷村高辻帳や目録の写、村寄目録、朱印改の様子書留などを含む「御判物写・御領知目録写」、④家康・秀忠などの徳川將軍発給の御内書、豊臣秀吉・秀次が発給した朱印状、前田利家・蒲生氏郷の起請文、浅野長政からの直筆書状類、徳川將軍の直筆書画、足利尊氏・同持氏らから発給されたとされる御教書・下文、系図類、重宝である小倉山色紙、松風硯、徳川秀忠から拝領した三匁玉差取棹鉄砲といった器物などが含まれる「御内書」、⑤藩主などの官位に係する文書である「位記・口宣」、⑥軍令状・古筆類・奉書・宸翰・書状、藩主の書画・画像などを含む「諸御書付」という六つのカテゴリーに分類されていたことが明らかとなる。慶応三年(一八六七)時点では、文久三年(一八六三)に上洛した藩主南部利剛が孝明天皇から賜った「天盃」を入れた小長持がこの他に存在し、これら重要文書・器物類と同様の扱いをうけていた。これら重要文書・器

物の外箱には、それぞれ藩主直々の封印「御直封」がされており、慶応三年八月の改の時点では七四枚の「御直封」がなされていたことが確認される。領知判物・領知目録はそれぞれ一箱の外箱にまとめて収められ、その箱に一枚ずつ「御直封」で封印され保管されていた。それら重要文書・器物類はさらに五棹の長持に収められ、「天盃」を収めた小長持と共に家老による封印がされていた。⁽⁸¹⁾ 長持に入れて保管されているのは、非常持ち出しの便を考慮したものとみられる。

注目したいのは、「南部内七郡」の支配を南部信直に認めた天正十八年七月二十七日付の豊臣秀吉朱印状は、領知支配の根源たる「御判物」ではなく、「御内書」として分類されていたということである。このような扱いとなったのは、領知判物のように明確に領知の支配を保証する記載のみがなされていないこと、あるいは、発給者が豊臣秀吉であり、政権担当者、領知宛行権者が徳川家に移行していた当時としては、すでに効力を失っていたためであると考えたい。⁽⁸²⁾

これらの管轄に当たったのは、南部家の御小納戸役人である。盛岡藩の御小納戸役人については、盛岡藩士星川正甫の著した「公国史」のうち「官職考」は、盛岡藩の役職について考察したものであるが、その御小納戸の項にはその職務として「公供の衣服冠帯ノ器財を出納すること」を掌る⁽⁸³⁾とある。また郷土史家一ノ倉則文氏によれば、「衣類各種の調度品の製造修理等を管掌する」役職であったとしており、⁽⁸⁴⁾両者の説をあわせると南部家の衣類・調度を担当する役職であったということになる。一方、阿部守雅氏および筆者は以前、御小納戸が絵師などを含む多くの職人を管掌していたことを明らかにした。⁽⁸⁵⁾ いずれにしろ盛岡藩の職制自

体の研究が不十分であることもあり、いまだにその職掌の全容は解明されていない。御小納戸の職務について検討がなされている彦根藩の事例をみると、職掌は藩主の日常生活の身辺雑務が主であり、特に能道具・馬具・腰物・屏風などの身辺道具管理に従事し、内書・奉書などの藩主宛重要文書の管理も行っていた。⁸⁶ 盛岡藩においては老中奉書・將軍御内書の台帳は別途作成されており、彦根藩のように内書・奉書の類を含む管理がなされていたかどうかは今後の検討課題だが、少なくとも領知宛行状類を含む藩主家宛重要文書や重要器物の管理は御小納戸役人が行っていたということができであろう。

領知判物等の平常の管理状況について言及することは、史料面から制約されて困難である。南部家の文書には、ただ一点、天明七年（一七八七）七月、朱印改に先だって藩の江戸詰役人が吟味を行った際、領知目録の上包紙にわずかなすれがあったため、御小納戸役人に対して判物の取り扱い方について心得が達せられた記録がある。⁸⁷ それによれば、このすれは表具師をよんで補修を加えたが、公儀の御用掛役人に提出するものでもあるから、虫干し等の際には細心の取り扱いを求めると共に、宛行状類を他の品々とは別にして、厳重な取り扱いをするよう申し合わせがなされた。このように宛行状類を含めた文書・器物類の保存を図るための虫干しが行われており、その際宛行状類が御小納戸役人によって取り出され、取り扱われていたことがわかる。

これらの厳重な保管体制からうかがえるのは、領知判物・領知目録という盛岡藩主の地位の根源たる文書は、藩政記録のような現用文書として普段見たり開いたりして用いられるものではなく、南部家重代の品々

が納められている宝蔵に、見ること自体がめつたにないいわば「宝物」として納められ、しかもその宝物の中でも最も重要なものとして位置付けられていたであろうことである。

すなわち、保管の在り方、それに加えて前章でみた朱印改時における厳重な取り扱いからは、領知宛行状という文書自体が、藩主の権威の象徴として荘厳化されていたことがうかがえる。さらには、荘厳化された文書を通して藩主に領内支配を認め、権威を与えている徳川將軍の立場も神秘化され高められているのである。文書そのものに存在の意味があり、それを有することに大きな意義があったと見なすことができる。幕藩制国家の支配のありようを映し出しているのが、領知宛行状類の管理ではないだろうか。

四 明治維新と領知宛行状

倒幕後、明治新政府は、徳川將軍発給の領知宛行状について、慶応四年（明治元年、一八六八）閏四月十九日、「領地高之儀、御改正可被仰付」という理由で、各宮家、公家、大名、寺社などに対し幕府が発給していた領知宛行状を新政府の内国事務局宛提出するよう命じた。⁸⁸ 新政府はそれ以降領知宛行状の回収を図り、所持者から判物・朱印状類が提出された。

このうち大名については、『復古記』で確認する限り、政府に対してなんらかの届け出（例えば、自家への領知宛行状がない旨届け出ている紀州徳川家や旧御三家付家老も含む）が確認できるものだけでも一六六家に及ぶ。⁸⁹ しかし、この提出状況は大名家毎にそれぞれ差違がある。

たとえば、閏四月二十四日、彦根藩は新政府の令達をうけて、徳川將軍家が彦根藩主井伊家に発給した宛行状すべてを差し出すのか、それとも最も直近の発給である徳川家茂のもののみを差し出すのか、さらに領知目録も差し出すのか伺い出た。これに対して新政府は、同月二十八日、「徳川氏より代々受居分不残差出候事、并領知目録差出候事」と回答し、領知目録も含めて徳川家が発給したすべての領知宛行状類が提出の対象となることを示した。⁽⁹⁰⁾この通達は、領知宛行状の回収を通じて、単に大名等の領知宛行権を新政府が一旦掌握し、「御改正」後に何らかの展開を窺わせるような内容とも捉えることが可能で、実際、彦根藩主井伊直憲やその実弟の越後与板藩主井伊直安、美濃郡上藩主青山幸宜、松江藩主松平定安ら、いわば徳川將軍家の存在により大名としての地位・特権を保証されてきた徳川家門・譜代の大名に加え、津和野藩主亀井茲監、山口藩主の毛利元封（のち元徳）といった新政府の中枢に近い大名ですら、徳川家発給の領知宛行状類を提出しつつも、徳川將軍家―江戸幕府に代わる宛行権者としての天皇―新政府を想定し、徳川家の領知宛行状に代わって、新たな天皇との主従関係に基づいた領知宛行状の発給を期待し願ひ出ている。⁽⁹¹⁾そして領知宛行状というのが、大名の権威や支配と深く結びついていることを大名・諸藩が深く認識していたことを示すものである。また、軍事力・構成員など諸藩の存在に依拠した連合政府ともいべき新政府が成立した段階で、大名や藩の存在基盤の否定は未だ現実的課題として認識されていなかったことの反映とみてよいだろう。

新政府の令達をうけて提出された領知宛行状類のうち、武家の分については明治六年（一八七三）の皇居炎上の際に焼失したという。⁽⁹²⁾このよ

うな状況では、本来ならば判物・朱印状類は大名家の手許には残らないはずである。ところがそれ以後も領知宛行状を華族である旧大名家が所蔵し、現存する原文書が引き継がれ残されている場合がある。⁽⁹³⁾即ち、領知宛行状類を新政府に提出をしなかった大名が存在したのである。盛岡南部家もそのような大名家の一つである。

盛岡藩に新政府から領知判物差し出しの命が届いていなかった訳ではない。慶応四年閏四月二十七日、盛岡藩京都留守居役山屋直治郎は新政府弁事役所に宛て次のような届け出を行っている。

今般領地高ノ儀御改正被成候付、旧幕府ヨリ受封ノ判物差出候様御沙汰ノ趣、国許美濃守へ早速申遣候得共、此節会津御征討中二付道中筋通行遅滞等ノ為メ差出方自然延引モ難計候間、此段御聞置被成下度奉存候、以上、

南部美濃守内

閏四月廿七日

山屋直治郎

弁事御役所⁽⁹⁴⁾

この届け出からわかるように、新政府の命は盛岡藩に伝えられているが、京都留守居役の山屋は、会津攻めのために街道が混雑していることを理由として、判物の提出が延引する可能性があることを示唆している。

周知の如く、この後東北地方の情勢は、奥羽越列藩同盟の結成、会津戦争をはじめとする新政府軍と同盟諸藩の戦闘、同盟諸藩の新政府軍への降伏と処罰へと進んだ。盛岡藩も七月末には同盟を脱退した秋田藩領に出兵して交戦し、また津軽藩境でも戦闘を交えるなど、新政府と対立する形となり、九月末に新政府側に降伏した。さらに十二月には盛岡か

ら白石へ転封を命じられ、一旦旧領との縁が絶ちきられた。⁽⁹⁵⁾

先に述べたように、盛岡藩は領知判物・領知目録を国許に保管していたが、混乱する状況下において、判物類を京都の新政府に差し出すのは物理的に困難だったとみられる。さらに盛岡藩の場合、白石転封で徳川家から宛われた領知と一旦縁がとぎれたこと、また徳川将軍によって認められてきた従来の領知権保証が、新政府成立によって喪失したため、新政府の達を厳密に解釈せずに提出しなかったとも考えられる。

いずれにしろ、南部家宛の徳川将軍領知宛行状類は、このような経過を経て、結果的に現在まで残されることになった。東北大名の中には、弘前藩、仙台藩のように領知宛行状が現在に残されている藩がほかにもある。盛岡藩同様の状況が存在したのか否か、今後検証する必要がある。

おわりに

以上、本稿では、もりおか歴史文化館所蔵の盛岡藩主南部家宛徳川将軍領知宛行状類と、それに関連した文書類の存在と特徴を述べ、領知判物・領知目録の発給手続き、南部家におけるその保管・管理状況を明らかにした。さらに、明治維新後の新政府による領知宛行状回収に提出されず原本が現存することに関し、史料をもとに推論を述べた。最後に、本稿における検討も踏まえつつ、残された課題について述べておきたい。

まず、領知宛行状・朱印改のもつ意味について考えを述べたい。笠谷和比古氏は、領知宛行状発給について、「將軍の発給する領知安堵状は

儀礼的性格の濃厚なもので、諸大名の領知石高は従前のものを単に追認するだけであって、実質的な意味はなく、ただそれ以上に、新將軍の權威を宣揚するところに政治的機能があつた」と述べ、発給行為を通して、新將軍が歴代將軍の正当な後継者だと確認し、領知安堵を通じて新將軍と諸大名間の主従関係を確認し、諸大名の領知領有が將軍の恩恵的承認に基づくものだという觀念の相互確認としての儀礼的行為が朱印改だったとする。⁽⁹⁶⁾

笠谷氏が述べるように、たしかに、將軍が代替わりの時に行われる領知宛行状発給作業は、將軍の權威を宣揚する儀礼的性格の強いものであった。しかし、手続き自体や領知宛行状のもつ性格を、実質的意味のない儀礼的性格という理解の中に閉じ込めてよいものであろうか。当時の政治の中で儀礼の持つ意味や、大名が当該文書を大事に扱った理由という観点から考えるべきではないか。

渡辺浩氏は、徳川政権下の統治について、身分格式を印象づける象徴的事が威信の系列を表象していたとし、それを自他に公示し、相互に確認する儀式が念入りに執行されたことにより、体制が維持されていたと捉えている。幕府の儀式には、氏の言葉を借りれば「御威光」というものが裏付けとして存在し、將軍の權威を行き渡らせる重要な意義が存在していた。⁽⁹⁷⁾ 儀礼と政治体制が密接に結びついた幕藩体制下、朱印改をめぐる行為自体は十分に政治的效果を挙げ得たと考えられる。

「大名が一番大切にした文書」である領知宛行状は、厳密に定められた書札礼に基づいており、將軍を頂点とする政治権力のヒエラルキーのなかで、大名の置かれた身分や位置が如実に反映するものだった。武家

政権の最高支配者である将軍が、その名による領知宛行権を掌握・行使し領知宛行状を発給することは、将軍の「御威光」を大名に強く印象づけるものの一つであった。その発給が莊重な儀礼を伴うことで、尚更將軍の「御威光」は大名に印象づけられる。さらに受領した大名も、領知宛行状の受領・回送・収蔵の過程で宛行状を丁寧に扱うことにより、將軍權威は神秘化され、「御威光」は完全なものとなったといえる。

大名にとって領知宛行権者である将軍から領知宛行状類を得て有することは、權威による自らの領有權の認証であり、領知支配の根源となったことはいうまでもない。大名が宛行状類を大切に保管するのは、朱印改での確認作業に備えてのことであるのはもちろんだが、領知宛行状という文書そのもの、またそれにまつわる要素も含めて、大名の石高・官位が意味をもっていた当時、大名にとって、身分や權威の根源として大きな意味合いをもつものだったといつてよく、加えて宛行状の提出、発給においてみられる儀礼的行為は將軍の「御威光」とその元における大名の領国支配という考えを大名側に行き渡らせる目的のもとでなされたこととみなすことが可能だろう。朱印改における領知内容の確認作業は、「寛文印知」の事例でも指摘したように、領知高決定や地名・領知高・支配区域の明確化を含む煩雑なものとなっており、そのうち本稿で取り上げた地名の変更をただして確定する作業が見出せる。発給過程の中で、幕府・大名が地域を把握し、支配を行うための土台がなされたものとみなせば、その結果として作成、発給される領知宛行状や領知目録とその発給作業は、実質的な意味合いが存在するものと考えられるべきではないか。

つぎに、「大名が一番大事にした文書」と位置づけた領知宛行状の子孫への伝世、すなわち当主の死去や隠居に伴い、重要文書や家の重宝がどのように引き継がれたのかという点である。この点について、南部家の場合は、史料が見出せるかどうか、博搜が必要だが、ここでは、仙台藩主伊達家の興味深い事例を掲げてその一端を考察することとする。

仙台伊達家では当主（藩主）が家督を譲る際、次の当主（藩主）に引き継がれる品々を「御譲物」といった。この制度が伊達家で開始されたのは、元禄十六年（一七〇三）、四代藩主綱村の隠居・五代藩主吉村襲封の際と考えられている。「獅山公治家記録」（獅山は吉村の諡号）巻一、元禄十六年八月二十五日条によれば、綱村から吉村への「御譲物」の筆頭に、「御判物 三通」「御領知御目録 二通」がみえる。⁽⁹⁾ また寛保三年（二七四三）、吉村が子息の六代藩主宗村に家督を譲った際（寛保三年七月十五日）の「御譲物」の書付である「伊達吉村御譲物の書立」では、「御譲物」の品数が増加しているものの、先の場合同様、品々の筆頭に、「御判物 五通」「御領知御目録 四通」が掲げられている。⁽¹⁰⁾ 綱村・吉村交代時に比べて領知判物と領知目録の数が増加しているのは、この間にあった將軍代替わりの朱印改・発給によるものである。「御譲物」には祖先ゆかりの品や、伊達家の軍旗・纏など当主の象徴ともなる品々も含まれる。そのなかで、領知判物・領知目録の置かれた位置が筆頭におかれるのは、朱印改に欠かさず提出しなければならない不可欠な文書ということもあるだろうが、本質的には、これらが仙台伊達家当主に与えられた、領知支配の根源としての重要性をもつものであったからともいえる。であるからこそ、領知宛行状類は大事にされ、次代に引き継がれる

ものとして認識されていたのであろう。

そのような認識はすべての大名家に共有されていたと考えるが、南部家やその他の大名家におけるその認識の検討については、今回触れることのできなかった津軽家の事例や、天保次以外の発給事例に関する史料を検証することなどもあわせ、今後の検討課題としたい。

【後記】本稿は、二〇〇〇年十二月十七日に弘前大学國史研究会第六八回例会で報告した「盛岡南部家宛領知判物・領知目録について―その記載内容と発給手続の検討―」と、二〇一二年九月九日にもりおか歴史文化館で開かれた「続はじめての古文書教室 II 大名が一番大事にした文書―領知宛行状―」の内容をもとに、その後の検討を加えまとめたものである。口頭発表の準備に際して種々のご指導・ご教示を賜った大野瑞男先生・故沼田哲先生、論文のもとになる発表の機会を与えていただいた弘前大学國史研究会、もりおか歴史文化館に深く感謝申し上げる。また、もりおか歴史文化館には、今回領知判物の写真掲載に特段のご高配をいただいたこともあわせて記しておく。

註

- (61) 拙稿「寛文印知」と奥羽地方」(『青山史学』二三、二〇〇五年)。
(62) いくつか事例を挙げると、延享二年(一七四五)十月二十八日に万石以上・寺社領朱印改御用を命じられた老中松平乗賢は、「惇信院殿御実紀」巻一、国立公文書館蔵(翌年五月九日に死去したため、同年五月十三日に老中堀田正亮が万石以上・寺社領朱印改御用を命じられている(『惇信院殿御実紀』巻三、前同所蔵)。また宝暦十年(一七六〇)六月

十二日に朱印改奉行を命じられた奏者番兼寺社奉行阿部正右は(『浚明院殿御実紀』巻一、前同所蔵)同年十二月三日に京都所司代に転任したため、翌四日、奏者番兼寺社奉行松平乗佑が替わって朱印改御用を命じられている(『浚明院殿御実紀』巻二、前同所蔵)。

(63) なお、林家の外に、貞享の朱印改には人見友元が関与しており(前掲「貞享御判物御朱印改記」、また、前号所収の本稿(上)において正徳朱印改に新井白石が関与していることは触れた)。

(64) 荻生茂博「江戸幕府儒者林家の位置―將軍家と林家―」(『米沢史学』九、一九九三年)。

(65) 正徳朱印改における新井白石の関与も、白石が徳川將軍家の權威向上を図っていたと考えれば、林家同様、幕藩体制の儀礼的秩序維持を図るために必要だったとみることも可能だろう。

(66) 「貞享御判物御朱印改記」による。

(67) 「旧記雜録追録」巻十五(鹿児島県維新史料編さん所編集『鹿児島県史料 旧記雜録追録 一』鹿児島県、一九七一年、七一九〜七二〇頁)。

(68) なお、盛岡藩において領知宛行状が国許を出立する際の詳細な記録が残るのは、嘉永七年(安政元年、一八五四)の事例を記した「御判物為御登被成候付御手続并諸書付」であるが、そこに記された手続きは、基本的に前回の天保八年の例を踏襲しているという。

(69) 拙稿「江戸時代初期における領知朱印改と大名―寛永朱印改における南部家の事例を中心に―」(大野瑞男編『史料が語る日本の近世』吉川弘文館、二〇〇二年)でも指摘したように、寛永十一年発給の領知判物については、領知目録が発給されていない。

(70) 前掲「御判物為御登被成候付御手続并諸書付」。

(71) 山本博文「將軍權威の強化と身分制秩序」(同編『新しい近世史① 国家と秩序』新人物往来社、一九九六年)。

(72) 藤實久美子「江戸時代中後期の「判物・朱印改め」について」(『学習院大学史料館紀要』一二、二〇〇三年)。

(73) 天保九年九月五日付南部家臣米倉七藏願書・別紙(「天保八丁酉年十月分翌戌三月迄利済公御留守留・同九四月分翌十亥八月廿四日迄利済公御滞府留・信侯公為御名代初而御暇御留守留」所収)。

(74) 明治後期、後に内閣総理大臣となった衆議院議員原敬の主唱によって編纂された『南部史要』(菊池悟郎編纂兼発行、一九一一年)二九六―二九七頁に興味深い記載がある。天保六年(一八三五)六月十七日に幕府勘定所より留守居役が呼び出され、先般書き上げた高辻帳には志和郡とあるが、元禄年間の書上では紫波郡とあり、文字の相違があると指摘されたため、宝暦年間の判物改で志和郡と認めたため、今回もその例によったと述べたところ、村名は順により改称は可能だが、国郡の名称は重大事であるとの指摘を受け、至急事実確認を要求された。月番老中への報告の都合もあり、江戸屋敷の裁量によって志和の文字を紫波と訂正した。しかし、その後盛岡から紫波の記載は誤りで志和が正相当とする報があったため、江戸屋敷では勘定奉行明楽茂村に懇願して、内分の取り扱いで紫波を再び志和と訂正し、以後幕府への書上その他公式書類に記すことになった。維新直前になってまた「紫波」表記が増え、これが定着した、というのである。これは、時期的にみて、幕府に提出された天保郷帳作成に関わる問題と推測されるが、実際のところは、領知宛行状類においては享保以降この表記が定着しており、この天保九年に南部家の意向が退けられたため、「紫波」という公式な郡名表記が改めて確定したことになる。

(75) 大野瑞男「江戸時代の郡名」(『月刊百科』二二七、一九八一年)、阿部俊夫「藩撰地誌『会津風土記』の編纂と会津四郡―寛文・貞享印知との関連で―」(『福島県歴史資料館研究紀要』一八、一九九六年)、拙稿、

前掲、「寛文印知」と奥羽地方」。

(76) 石井、前掲「大名の御代替朱印改について―棚倉藩の場合―」。また、藤實久美子氏は、転封などの領知替などがあった時、朱印・領知目録が発給されていない場合に提出するものとしている(藤實、前掲「江戸時代中後期の「判物・朱印改め」について」)。

(77) 「天保八丁酉年十月分翌戌三月迄利済公御留守留・同九四月分翌十亥八月廿四日迄利済公御滞府留・信侯公為御名代初而御暇御留守留」。

(78) 内藤政優は、南部家から正室を迎えた彦根藩主井伊直中の子であり、南部家の親族として依頼されたとみられる(「三河拳母内藤家譜」「井伊家譜」一、東京大学史料編纂所蔵)。

(79) このことから、盛岡藩においては、重要な文書が御小納戸役人の管理下にあったことがわかる。なお、母利美和氏によって、彦根藩井伊家においても、御小納戸役人の職掌として藩主の日常生活の身辺雑務が主であり、特に能道具・馬具・腰物・屏風などの身辺道具管理に従事するが、内書・奉書などの藩主宛重要文書の管理も行ったことが明らかにされている(彦根藩小納戸役の職制と機能―明和七年御小納戸方日記を中心に―、彦根城博物館編集・発行『第二回大名道具収蔵館集會報告』一九九四年所収 研究発表レジュメ)。

(80) 『日本歴史地名大系3 岩手県の地名』(平凡社、一九九〇年)四八七頁。

(81) 三匁玉差取棹鉄砲は藩主側近の側用人による封印がされていた。

(82) この朱印状の詳細は、拙稿「豊臣政権と北奥大名南部家」(山本博文・堀新・曾根勇二共編『偽りの秀吉像を打ち壊す』柏書房、二〇一三年)を参照されたい。

(83) 一八〇五―一八八〇。各所の蔵奉行、勘定吟味役、勘定奉行、代官などを歴任。藩命により藩士諸家の系図を編纂、文久元年(一八六二)に「参考諸家系図」を藩主利剛に献じた。その他の著書に「公国史」、「盛岡砂子」

などがある。盛岡市史編纂委員会編纂『盛岡市史』第八巻（復刻版）（トリョー・コム、一九八二年）一六八～一六九頁に郷土史家太田孝太郎による評伝がある。

(84) 一ノ倉則文「南部藩官職考（三）」『奥羽史談』二二六、一九五九年。

(85) 阿部守雅・千葉一大「盛岡藩の「御抱絵師」について―諸史料にみる御抱絵師の系譜・職務・修業―」（『岩手県立博物館研究報告』一五、一九九七年）。この論文で、藩政組織上、盛岡藩に抱えられた絵師は、士分待遇の「御絵師」と職人待遇の「御小納戸支配御絵師」に分けられることを明らかにした。言及した御小納戸が管轄した絵師とはむろん後者の方である。

(86) 母利、前掲「彦根藩小納戸役の職制と機能―明和七年御小納戸方日記を中心に―」。

(87) 「御判物御用覚書」（もりおか歴史文化館蔵）。

(88) 東京帝国大学蔵版『復古記』第四冊（内外書籍、一九二九）三八二頁。

(89) 右同書三九八～四一〇、四五四～五四二頁参照。

(90) 「行政官記 自戊辰閏四月至八月 諸侯大夫士朱印」一（国立公文書館蔵）所収閏四月二四日付彦根藩伺書。

(91) これら大名の願意は、前掲「行政官記 自戊辰閏四月至八月 諸侯大夫士朱印」にみえる。

(92) 福井保「内閣文庫所蔵の「徳川家判物并黒印」について」（『北の丸―国立公文書館報―』創刊号、一九七三年）、および大野、前掲「領知判物・朱印状の古文書学的研究―寛文印知の政治史的意義（二）―」。

(93) 東北地方では、盛岡南部家の他、仙台伊達家（東京帝国大学文学部史料編纂掛編纂・発行『大日本古文書 家わけ第三 伊達家文書之十』一九一四年所収）、弘前津軽家（国立史料館蔵。『新編弘前市史』編纂委員会編纂『新編弘前市史』資料編二・近世一、弘前市市長公室企画課、

一九九六年所収）、白河阿部家（学習院大学史料館寄託文書、白河市歴史民俗資料館・白河集古苑編集・発行『武家の文化―近世大名阿部家の遺宝―』一九九六年所収）といった旧大名家に判物・目録類の正本が残った。

(94) 「山屋直治郎京都勤番往復公書抄」（岩手県立図書館蔵）。

(95) 経緯は、松尾正人『廃藩置県』（中央公論社、一九八六年。本稿では一九九七年刊行の第一〇版を使用）一〇～一三頁を参照されたい。

(96) 笠谷和比古『近世武家文書の研究』（法政大学出版局、一九九八年）四一～四五頁。なお、笠谷氏は、幕府が発給する領知宛行状を「領知安堵状」と表記している。確かに朱印改によって発給される領知宛行状は結果的に領知安堵につながっている。しかし、領知宛行状は安堵行為ばかりではなく、既に大野氏や針谷氏、種村氏の所説を引いて述べたように、実際宛行つたり、領知替等が起こった場合発給されることもある。したがって、領知宛行状すべてを領知安堵状という名の下にまとめるのは適切ではないように思われる。

(97) 渡辺浩二「御威光」と象徴―徳川政治体制の一側面―（『思想』七四〇、一九八六年。のち『東アジアの王権と思想』東京大学出版会、一九九七年、一六～六〇頁所収）。

(98) 前掲「江戸時代初期における領知朱印改と大名―寛永朱印改における南部家の事例を中心に―」で、寛永朱印改の事例から郡名・郡域が確定する経緯を紹介している。

(99) 仙台市博物館編集・発行『大名の精華―仙台伊達家の至宝』（一九九三年）八八頁所収写真真版による。

(100) 同右。

（ちば・いちだい 青山学院大学・聖心女子大学講師）

表 3 南部家が要請した郡名・村名の変更

郡名	天明度領知 目録記載の 地名	変更後の 地名	現在地名	備考
北郡	大不勤村	大不動村	青森県十和田市大不動	
	城沢村	城ヶ沢村	青森県むつ市城ヶ沢	
二戸郡	大梁村	大築村	岩手県二戸市安比	
閉伊郡	山口村	上山口村	岩手県遠野市土淵町山口	同名の村が郡内2箇所があり、先に目録に現れるものを変更
	釜石村	浜釜石村	岩手県釜石市只越町などの中心市街地	同名の村が郡内2箇所があり、後に目録に現れるものを変更
	吉里々村	吉里々々村	岩手県下閉伊郡大槌町吉里吉里地区	
岩手郡	安庭村	阿庭村	岩手県岩手郡雫石町西安庭	同名の村が郡内2箇所があり、先に目録に現れるものを変更
	梁川村	築川村	岩手県盛岡市築川	
稗貫郡	金谷村	金矢村	岩手県花巻市金矢	
三戸郡	菟内村	兎内村	青森県三戸郡五戸町兎内	
紫波郡	紫波郡	志和郡	岩手県紫波郡紫波町・矢巾町、盛岡市の一部（旧都南村）	
	草刈村	草苅村	岩手県紫波郡紫波町草刈	

「御様子留下留」（もりおか歴史文化館蔵）、および『日本歴史地名大系 岩手県の地名』（平凡社、1990年）、『角川日本歴史地名大辞典 3 岩手県』（角川書店、1985年）を参照して作成